

戦国期摂津国における近衛家領

鶴崎 裕雄 (帝塚山学院大学名誉教授)
 湯川 敏治 (中世公家日記研究会)

はじめに

地域史や地域文化は扱おうとする地域の特徴を探ることが中心的な課題である。本稿ではこれまで鶴崎と湯川両人がそれぞれ個別に、または共同で扱った成果をもとに、戦国期の近衛家領を中心に摂津国（主に大阪府下）の様相を捉えようとするものである。

五摂家の一つであった近衛家には歴代の当主により集められ、伝えられた文書や宝物を所蔵する陽明文庫がある。陽明文庫の所蔵品は二〇万点にも及び、それらは公家文化のみならず日本の歴史を知るうえで貴重な品々であり、^①当然、近衛家領の荘園史料も多数含まれている。例えば鎌倉時代中期の建長五年（一二五三）十月二十一日作成の『近衛家所領目録』（奥書によれば室町時代の享徳三年（一四五四）に書写されたもの）、さらに戦国時代の当主である近衛房嗣・政家・尚通の三代がそれぞれ記した家産経済の記録である『雑々記』『雑事要録』などが残されている。^②もとより房嗣・政家・尚通には近衛家当主としての日記『後知足院御記』『後法興院記』『後法成寺閼白記』があるが、『雑々記』『雑事要録』は日記とは別に同時期に書かれた近衛家の家産経済の実態、特に家領からの収入が記されており、戦国期の近衛家領の様相、さらには公家社会の荘園の管理状況が如実にわかる記録である。

本稿は、摂津国の近衛家領が建長五年の『近衛家所領目録』の記載と二〇〇年後の戦国期の『雑々記』『雑事要録』の記載とではどのように相違するか、どのように変化したか眺めることにする。

まず『近衛家所領目録』に記された摂津国の近衛家領について、大阪府下の自治体史、『豊中市史』『箕面市史』『茨木市史』『摂津市史』『大阪府史』『新修大阪市史』『吹田市史』『新修池田市史』ではどのように扱われているか、自治体史を発刊順に概観しよう。

一・大阪府下の自治体史に見る摂津国近衛家領

『近衛家所領目録』については『鎌倉遺文』10巻（昭和51年）、『吹田市史 第四巻』（昭和51年）、『摂津市史 史料編一』（昭和59年）に翻刻されており、容易に見ることができる。

近衛家は、中臣鎌足直系の藤原氏北家であるが、鎌倉時代の文治二年（一一八六）、兼実の代に近衛・九条の二家に分かれた。さらに仁治三年（一二四二）以後、近衛家からは鷹司家が分立し、九条家からは一条家・二条家が分立し、五摂家が誕生した。『近衛家所領目録』（以下『目録』と略称）は近衛家から鷹司家が分立するに当たり、所領を明確にするために作成された目録で、中村直勝氏は『目録』記載の所領の領有系統を明らかにし、処分した時期を建仁二年（一一〇二）十二月から承元二年（一一〇八）十月の間と推定している。^③

次いで永原慶二氏は『目録』により領主権の構造を解明し、一六五の家領を九つの所有形態に分類した。^④さらに橋本義彦氏は『国史大辞典』^⑤（吉川弘文館 昭和60年）「近衛家領」の項目で、『目録』の解説とともに、新たに次の六つの所領形態に分類した。

- ① 私的な別相伝地 一四
- ② 本所として一定の得点を収取する所領 五〇
- ③ 進止権を保留して有縁の寺社に寄進した所領 五
- ④ 基本的な年貢収取権を寺社に寄進した所領 四
- ⑤ 本所として荘務を進退する所領 六〇

第1表 (摂河泉の近衛家領)

時代別史料 及び自治体史 (自治体史発行年月)					録期倉	戦国期			貝塚市史		豊中市史		箕面市史		茨木市史		柏原市史		高槻市史		摂津市史		大阪府史		泉南市史		新修		新修		泉大津市史	
						近領衛目家録所	雑々記	雑事要録																			年記雑々	大阪市史		吹田市史		
					支配別				経営有無	昭30	3	昭36	3	昭39	12	昭44	6	昭48	3	昭52	2	昭52	3	昭54	11	昭62		7	昭63	3	平2	2
						目	雑	目		雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑	目	雑
枚方市	榎並上荘東方				西成郡	大阪市	都島・城東区	本一本本本																●				●				
	榎並上荘西方				東生郡	〃	〃																●				●					
	榎並下荘				〃	〃	城東・鶴見区																●				●					
	放出村				〃	〃	〃																●				●	●				
	番匠給				〃	〃	〃																									
	仲牧				島上郡	高槻市	芝生・唐崎	本本一本		○	□																					
	五位荘				〃	〃	〃			○																						
	大原荘				〃	〃	原付近			○																						
	沢良宜村				〃	茨木市	沢良宜			○				●									●									
	水尾				〃	〃	水尾			○	○																					
摂津市	熊丸名				〃	〃	(水尾熊丸)			○																						
	山田村				〃	吹田市	山田			○																						
	片山村				〃	〃	片山			○																						
	垂水東牧				島下郡	〃	垂水カ	本		○			●		●		●		△			●				●						
	小薬院				〃	〃	垂水カ			○																						
	垂海				豊島郡	〃	垂水・江坂	一		○	□		●		●		△			●						●			●			
	垂水西牧				〃	〃	江坂・南郷			○			●		●					△		●				●			●			
	新免村				〃	豊中市	本町周辺			○	○		●		●																	
	熊野田村				〃	〃	熊野田			○																						
	細河荘				〃	池田市		一一																●				●				
八尾市	八多荘				〃	〃	畑町																●						●			
	天王畑				〃	能勢郡	能勢町			○													●									
	棕橋東荘				〃	豊中市	倉橋	一					●		●								●					●				
	棕橋西荘				河辺郡	尼崎市							●		●								●						●			
河内市	橘御園				〃	〃	立花																					●				
	富松五位田				〃	〃	富松			○																			●			
	多田荘				〃	川西市	多田																									
	六瀬村				〃	一	猪名川町			○																						
和泉市	弘井荘				郡未詳	一																										
	御位田				〃	一																										
	舎人名				〃	一				○	□																					
	辺部				〃	一				○																						
	菅井五位田				〃	一				○																						
	大同名				〃	一				○																						
本御位田				〃	一				○	□																						
和泉市	河内牧				古市郡	柏原市		本									△															
	河内位田				郡未詳																											
	今泉荘				和泉郡	泉大津	横尾川北岸	一本本															●							△		
和泉市	信達荘				日根郡	泉南市	信達															●										
	御櫛造				〃	貝塚市	近木	一本本														●			●							
摂津市	大番	穂積福井荘				島下郡	茨木市	穂積福井郡	本		○						●						●									
		別府				〃	〃	〃			○																					
		味舌				〃	摂津市	別府			○																					
		南郷				〃	〃	味舌			○													●								
		垂水				〃	吹田市	江坂付近			○																					
		矢田				〃	〃	垂水			○																					
郡未詳																																

注

- 1: 「近衛家所領目録」の「支配別」欄で、「本」は本所、「一」は一族の支配を示し、『大阪府史』に従った。
- 2: 戦国期に入り『雑々記』『雑事要録』『年記雑々』欄、○印はそれぞれの記録に記載されているもの。なお、『年記雑々』は、『大永三年記雑々』『大永四年記雑々』のことで、□印は荘園名の記載だけで、年貢納入の記載はない。
- 3: 自治体史で「目」「雑」の区別は、「目」は「近衛家所領目録」、「雑」は「雑事要録』『雑々記』。
- 4: 「近衛家所領目録』『雑事要録』『雑々記』を活用し、当該荘園を説明しているものは「●」を付し、「△」は特に使用史料を明記していないが、当該荘園に触れている自治体史。
- 5: その他、河辺郡以西は現在の兵庫県のため参考に揚げるに留めた。

⑥在地領主を請所として一定の得分権を持つ所領 二〇

『目録』の家領数は、永原氏が数えた一六五と橋本氏の数えた一五三との差はあるが、以下おおよそその事柄については橋本氏の説に従うこととする。

『目録』と『雑事要録』『雑々記』などに記された家領の、推定も含め、現在の所在地を示し、それらの家領を記載する自治体史を刊行順に掲げたのが第1表「摂河泉の近衛家領」である。平安時代にはじまる近衛家領は摂津国に集中し、現在の自治体別に見ると、大阪府の大阪市・池田・豊中・箕面・吹田・茨木各市及び兵庫県一部（尼崎市ほか）に存在した。

豊中市史 昭和36年刊

『目録』の近衛家領についての説明は、第二章「中世の豊中」第一節「豊中の荘園」―「摂関家領垂水牧」にはじまる。平安時代初期の九世紀初頭、千里山丘陵一帯の垂水牧の摂関家所領化が進行する。十世紀後半から十一世紀前半にかけ、藤原政権は栄華を誇り、摂関家には全国の荘園が集中する。

摂関家の荘園となった垂水東牧・西牧の荘域は、それぞれ『勝尾寺文書』『今西家文書』により、東牧は旧島下郡の宿久村（茨木市）・粟生村（箕面市）・片山村・山田村（吹田市）で茨木川と勝尾寺川を結ぶ西側に比定し、西牧は旧豊島郡の垂水村・榎坂村（吹田市）・小曽根村・穂積村・熊野田村（豊中市）・桜井郷・萱野郷（箕面市）で神崎川（三國川）・猪名川・箕面川の範囲に比定し、東牧（島下郡）・西牧（豊島郡）の境界を吹田市の垂水神社と推定している。

続いて摂関家が垂水東牧を春日神社へ寄進した時期は平安時代後期の藤原忠実の代で、預所の補任権や得分権は近衛家にあつて、春日社へは年貢の一部が近衛家から納付される仕組みとなっていた。西牧が春日社へ寄進されたのは、東牧より遅く、藤原氏が近衛家と九条家に分かれた後のことで、鎌倉時代初期の近衛家二代目の基通の代とする。西牧が春日社へ寄進されたとはいえ、本所は近衛家で興福寺学侶が管理権を持ち、春日社は領家としてその運営に当たった。運営の実務は春日社家の大東氏が相続する牧務職（名主職）を行い、現地代官には今西氏が遣わされた。春日社には

南郷・北郷・若宮の三方座があり、南郷は桜井郷・榎坂郷で今西氏が支配し、北郷は中東氏が支配した。

第二節「鎌倉時代の豊中」では、垂水西牧は北郷・南郷による二分支配が春日社によって行われていたが、春日社は西牧全域を支配できたのではなく、『今西家文書』の文治五年三月の日付がある「榎坂郷田畠取帳」などにより、中央と結びついた大杜寺の力が交錯している中でそれぞれの荘園を支配したと説明されている。

棕橋荘（豊中市南部の庄内付近、兵庫県尼崎市神崎付近）は第二節の三「承久の変と棕橋荘」で触れられている。『目録』によれば棕橋荘は鷹司兼経に譲られた家領であったが、鎌倉時代初期には後鳥羽上皇の寵姫の亀菊の領地となった。源頼朝の没後、朝廷側と幕府側に対立が生じ、特に荘園を巡る経済的対立が目立った。棕橋荘も朝廷・幕府の対立の一つで、地頭が領家側である院の命令を無視して押領したため、院・朝廷は幕府へ停止を要求した。このことが承久の乱の一因となった。こうした経緯を経て、後年、室町幕府を開いた足利尊氏は、棕橋荘を東大寺へ寄進し、荘内の長島（豊中市豊南町）は箕面の勝尾寺へ寄進された。

「大番国々」は摂関家大番領のことで、大番舎人を出し、摂関家の雑役や護衛に従事した。榎坂郷は摂関家大番領の一つであった。

『豊中市史』の第二章では十二世紀初頭には西牧に大番舎人の存在を見ることが榎坂郷が大番領であったことを推定し、『目録』には摂津国の大番領の地名は記されていないが、第1表「摂河泉の近衛家領」中、「摂津大番」は『雑事要録』に記されている大番所の地名を入れた。この他、二「その他の荘園」に新免荘を載せる。

なお、『今西家文書』は『豊中市史』史料編二（昭和36年）に採録されているが、平成十三年十月二十日から十一月十三日にかけて豊中市の事業として『今西家文書』の全面的な調査が行われ、平成十六年三月、豊中市教育委員会より『春日大社南郷目代 今西家文書（本文編）』が刊行された。

箕面市史 昭和39年刊

第二章「中世の箕面」第一節「中世箕面の形成」三「摂関家領垂水牧の成立と展開」に近衛家領垂水牧を述べる。前の『豊中市史』でも述べてい

るが、九世紀末の昌泰年間（八九八―九〇〇）ごろ、垂水牧をはじめ摂津・河内の「公私牧野」には「牧子之輩」と呼ばれる住民がおり、雑役からの免除を得るため、権門勢家の私的従属民となり、身分的特権を得て「寄人」と呼ばれた。

また、『執政所抄』（改定史籍集覧27冊）には「垂水東牧廿駄 同両中駄、散所百十駄（公儀方七十駄、兼弘方四十駄）」とあって「散所」の記載がある。「散所」の住民は牧における牛馬や駅馬の供給に携わる一方、垂水牧は北部に西国街道（山陽道）、南部に神崎川（三国川）という水陸交通の要所があるので、住民は摂関家への年貢や上納物の運搬に携わっていたと指摘しているが、その場所とは不明とする。

茨木市史 昭和44年刊

第三章「中世の茨木」第一節「茨木の諸庄園」のはじめに見える沢良宜村は『目録』に記された近衛家領ではなく、左衛門尉源師行領から山城国珍皇寺敷地内の田畠と交換して珍皇寺領となった庄園である。

茨木地域の『目録』記載の摂関家領として「庄務本所進退処々」の福井庄（茨木市東福井・西福井・南安威ほか）がある。「庄務本所進退処々」とは庄務権を持つ領家が別にある庄園で、福井庄は近衛家が一定の得分権を持ち、藤原氏が春日社参詣の際に供奉人の食事費のための屯食を負担した。後に一部の得分が興福寺へ移された。「庄務本所進退処々」の沢良宜庄（茨木市沢良宜付近、前述の珍皇寺領沢良宜村とは別）も、後に興福寺大乘院が管掌し、仏聖会料・慈恩会・春日御八講の費用を負担した。

千里丘陵を境に東西に分けられた垂水牧の内、垂水東牧が茨木市域に属する。『目録』では「年貢寄神社仏寺所々」に分類された地で、十二世紀前半に年貢だけは春日社へ寄進され、雑事・雑役は摂関家（近衛）に残されたため、近衛家の直接支配が比較的遅くまで続けられたと推定する。

第二節「鎌倉時代の茨木」でも東牧を取り上げ、平安時代末の永暦元年（一一六〇）の東牧寄人の申文掲載の訴訟事件（『平安遺文』三一―一七）を取り上げている。この事件を例に東牧の構造として、本所直属の名田と他家に分与された名田の存在を指摘し、京都の貴族の都市生活を支えたとする。この訴訟事件は『箕面市史』も述べている。

摂津市史 昭和52年刊

摂津市市域には『目録』に記された近衛家領は存在しないが、第四章「中世の摂津市域」第一節「鎌倉時代の摂津市域」には、春日若宮の神主中臣祐賢の日記『中臣祐賢記』記載の摂津国住人茂忠法師の刃傷沙汰事件を紹介する。この事件は、摂津国豊島郡長興寺（豊中市長興寺）で茂忠法師が春日神人を刃傷し、報復のため春日社の南郷・北郷・若宮の三方神人が味舌（摂津市）を襲い、茂忠法師は逃走、茂忠の四軒（西牧三軒・味舌一軒）の家が焼失された。この他にも『中臣祐賢記』から榎坂郷（吹田市江坂）の郷民が神供米を不納して春日社神人三十人に打擲刃傷を与え、本所の近衛家の使者にも危害を加えるなど、市域外の近衛家領関連の反抗事件を紹介する。

第二節「南北朝・室町時代の摂津市域」には、土豪・国人衆の庄園侵略の姿として、『今西家文書』により、摂津市域の土豪三宅氏が、応仁・文明の乱ごろから垂水西牧を始め、穂積村・小曽根・服部へ進出する状況を紹介する。

大阪府史 二巻 平成2年刊、三巻 昭和54年刊

近衛家の庄園は第二巻・第三巻に取りあげられている。第二巻は、古代編Ⅱ、第三章「平安時代の大坂」第十節「摂河泉の庄園と公領」、第三巻は、中世編Ⅰ、第二章「庄園の動向」第三節「摂関家領の動向」2「近衛家の庄園」、第四節「社領の発達」2「春日社領垂水西牧の動向」付、垂水東牧」にある。

まず第二巻では大阪府下の庄園を個別に説明し、『目録』記載の近衛家領では、摂津国の垂水東牧・垂水西牧・棕橋・榎並・放出、河内国の坂門牧、和泉国の御櫛造・信達の各家領を取りあげ、大番領として味舌荘を取り上げる。

摂津の垂水東西牧については他の庄園と錯綜した存在であることを伝えるが、錯綜関係を文献史料だけでなく、出土遺物を掲げて説明しているのは、他の自治体史では見られない説明である。

承久の乱の一因となったとされる庄園、棕橋荘は、摂関家領の庄園とは別の王家領庄園で、棕橋東荘の北部にあったと推定している。

榎並荘は『目録』に京極殿領内とあり、京極殿は藤原道長の孫師実で、師実の時代、すなわち平安時代後期には支配が確立されていた。榎並荘から分離した放出村はハナチデと読まれ、ハナチデは寝殿造りの離れの意味で、藤原摂関家の別荘があった地であることを推定し、近衛家が本所で預所として高階家があったとする。

和泉国には今泉荘・近木郷（近衛殿御櫛造）・信達荘があった。信達荘は師実の孫の忠実娘高陽院泰子を経て近衛家に伝来した家領とする。

第三卷では第一章第四節で垂水牧・榎坂の悪党に触れ、同章第五節では近木郷を紹介する中で、『目録』記載の「御櫛造」にも触れるが、近衛家領の説明の中心は、次にあげる第二章第三節2「近衛家の荘園」である。『目録』記載の摂津の、それも大阪府下の近衛家領を表にあげ「近衛家の荘園」（表50）として整理し、家領を「一族関係者支配」「本所支配」の支配別に分類する。次いで個別家領の現在地を見て、榎並・沢良宜・椋橋・福井・八多・細河・今泉・信達・御櫛造の伝領を述べる。

八多荘は池田市畑町付近にあったと推定される地で、『目録』によると冷泉宮領であった。冷泉宮は三条天皇の皇女僊子で、藤原信家との間にできた娘が師実の妻になった。そのため僊子の領は近衛家へ伝領された。細河荘は池田市の五月山の北側にあり、関白忠実から近衛家へ相伝された。現在、細川の地名はなく、中学校名として残っている。

第二卷第二章第四節の2「春日社領垂水西牧の動向 付、垂水東牧」には、『今西家文書』のうち、西牧の検注帳「春日御社垂水西御牧榎坂郷文治五年御検注加納田畠取帳」（以下「検注帳」）を用いて垂水牧を分析する。「検注帳」は春日社が他領と交錯した西牧の地を把握するため国衙に依頼して作成された。それによれば榎坂郷には二十六の領主が存在し、所領の構造は「名」が支配収取の単位であり、存在形態は一町未満の百姓名は一ヶ村に散在するが、大きな名や領主名は数ヶ村にまたがって散在し、その中で名田が集中して存在する村に名の屋敷（西牧の北部山麓）が分布するのが特徴であった。粟生村を例に、所当米は国衙、雑役としての炭・焼米を摂関家へ、後には春日社へ納めるようになったと説明する。

近衛家の東牧支配は年預に支配収取をさせ、年貢は春日社の神供料に宛

てていた。しかし近衛家は源平合戦により遠国の荘園を失った分、収入減を垂水牧で補充しようと支配を強化したため、在地では近衛家を好まず、春日社の支配を望んだ。さらに出来つつあった住民の共同体意識が負担の軽減を求め、神役の春日社を望んだ。一方春日社では、東西牧とも領域内に春日社を分祀し、住民の有力者を神人とし、春日社の地方組織として組み込み、組織強化を図ったとする。

新修大阪市史 昭和63年刊

近衛家領に関しては第二卷第二章「鎌倉時代の大坂」第二節「中世前期の荘園と公領」3「摂津東成郡の荘園と公領」に、大阪市内にあった『目録』掲載の近衛家領として、榎並荘と放出村をあげる。

まず榎並荘の荘域は、旭区・都島区・城東区北部・鶴見区一部にあったと推定する。平安時代に榎並荘をめぐって太政大臣藤原信長と信濃守藤原敦憲の間に相論が起り、敦憲は信長に対抗するため榎並荘を関白藤原師実に寄進したことにより摂関家領となった。続いて伝領の経緯に触れ、鎌倉時代中期の十三世紀中ごろ、河内守護三浦泰村の榎並荘押領があった。その後、榎並下荘が東方と西方に分けられ、東方には鎌倉末期、東国御家人城三郎の所領形成が認められ、本家・領家の近衛家と地頭の城三郎による下地中分の分割があり、近衛家支配の後退を招いたと推定する。室町時代に入ると榎並下荘は京都北野神社の別当職である曼殊院門跡に寄進され近衛家の手を離れた。

放出村については、前述の『大阪府史』と同様、ハナテンと発音する理由を述べる。また放出荘と呼ばず放出村とするのは、放出村は摂関家の荘園であった榎並荘に附属する隣接小所領であったからか、もともと国衙領放出村であって、その中に摂関家の別荘と附属する田畠所領があったことで、放出または放出村と呼称したのではないかと推定する。南北朝時代、家長であった近衛経忠が後醍醐天皇に荷担して京都を出奔、従兄弟の近衛基嗣が北朝で関白につき、近衛家内に波乱があったため、建武四年（一三三七）、放出村の円満院領の二町歩分が不断光院へ安堵され、以後、不断光院と縁があった九条家の支配を確認する。戦国期、放出村の史料として近衛政治家の『雑事要録』がわずかに言及されている。

吹田市史 平成2年刊

近衛家領に関する記述は、第一巻第四章「古代の吹田」第三節「王朝時代の吹田地方」一「律令制の衰退と荘園の発達」にあつて、垂水東・西牧の概要から摂関家領として成立した時期の推定を行い、この説明を基に吹田地方の荘園成立の特徴を捉える。第五章「中世前期の吹田」第一節「荘園の発達」一「新たな所領荘園の形成」では、『今西家文書』「垂水西牧榎坂郷田畠取帳」により旧榎坂郷の入り組んだ所領構成を概説する。二「荘園の発達と諸問題」では、垂水牧が拡大されるに従い、国衙との紛争や東寺領垂水荘の境界争いを取り上げ、平安末期に摂関家領の垂水東・西牧が斜陽化する原因を探っている。原因として白河法皇と関白藤原忠実の不和、牧内の土豪や住民の対立と離反をあげる。法皇と忠実の不和に端を発し、忠実の氏神に祈念する心情が東牧を春日社へ寄進することとなったとし、その時期を平安時代後期、保安二年（一一二一）正月とする。土豪や住民の対立離反の原因を現在の岸辺東部の熊里用水池であつた竹池灌水争奪をあげ、灌水争奪が東牧の土豪層の在地領主化へと進展し、摂関家が衰退し、春日社や興福寺が進出したと説く。

第三節「荘園支配の二側面と京神の遊行」では、衰退する支配権の回復に務める春日社の姿を紹介している。すなわち『大阪府史』でも説明に使われた「春日御社垂水西御牧榎坂郷文治五年御検注加納田畠取帳」（『吹田市史』では「取帳」と略称、『大阪府史』は「検注帳」と略称）は院庁の指令で国衙が作成したものに基づき、春日社が在地の支配権を強化する目的で作成して社領を明確にしたとする。さらに春日社は領内に春日社の末社を分祀し有力農民を神人化して支配を押し進めた。しかし西牧では、以前から支配の仕方に本所である近衛家と領家である春日社及び興福寺との間に矛盾が生じ、柔軟策をとる近衛家と強攻策をとる春日社・興福寺には年代が下がるほど対立は深まり、それを知った在地では年貢や公事の軽減を求めて抵抗するようになる。結果、近衛家の柔軟策に従い、近衛家の御教書により和解、問題解決のため村請制が成立したと指摘する。

新修池田市史 平成9年刊

『目録』記載の池田市内の近衛家領には細川荘と八多荘がある。まず第

五章第二節4「荘園公領制」で、広く摂津の近衛家の荘園の構造・成立の説明のため、垂水西牧と椋橋荘を取り上げるが、いずれも池田市内の荘園ではない。ただ椋橋荘は第七章第一節2「承久の乱と池田地方」では長江荘と倉橋（椋橋）荘が地頭職補任問題で承久の乱の原因となったこと、また両荘が神崎川と猪名川の合流地付近に存在し、水上交通の要衝であつた荘園で、検物を交易した商人の本拠地であつたと推定する。

細川荘は第七章第一節3「荘園村落の展開」で触れ、細川荘は近衛家が鷹司家と分家した際、鷹司家へ伝領され、正応六年（一二九三）四月には鷹司兼平が息子の基忠と兼忠兄弟へ分配した文保年間（一二二七～一九）となつて勘解由小路兼仲が預所に補任されて代々相伝された。しかし領家は鷹司家のままである。その後、細川荘は、同じ近衛家領で河辺郡（兵庫県）にあつた請所型荘園の多田荘の加納分として組み込まれていくとする。貞治三年（一二六四）九月、勘解由小路兼綱は国衙や住吉社を北朝へ訴える。この訴えを契機に勘解由小路家では支配権を失い、康正二年（一四五六）ごろ、三条公綱が請所となり、文安五年（一四四八）八月には本家職分が池田充政と契約され、池田氏の支配下におかれることとなった。

二三頁の第1表「摂河泉の近衛家領」は右に見た大阪府下の自治体史の刊行順に掲げたものである。この他『貝塚市史』『柏原市史』『高槻市史』『泉南市史』を揚げたが、「△」印を付して欄外の注4で示したように『目録』を参照したようであるが、特に使用史料を明記していないので紹介は割愛した。

以上、近衛家領を論じる自治体史を見たが、『目録』には算用が記されていないため、近衛家領（当時は摂関家領）の伝領形態や支配構造の研究対象となるが、年間の収入などは不明である。各自治体史は『勝尾寺文書』『今西家文書』『春日神社文書』などを用い、支配状況・農民闘争・年貢徴収など、それぞれの地域の特徴を考察しようとする。また市域に近衛家領を持たない自治体史も国人衆の他地域の近衛家領への侵入などに関連させて記述する。しかしこれら自治体史が発刊されたとき、まだ『雑事要録』

は十分知られていなかったため、『摂津市史』『吹田市史』では『雑事要録』を史料編に掲載する程度で、『新修大阪市史』にいたってやっと放出村の史料として論述されるようになった。

第三節で『目録』に記された鎌倉時代の近衛家の家領が、戦国期にはどのように存続し、変化したか、『雑事要録』を用いて見ることとするが、その前に第二節で近衛家と摂津守護細川氏との交流を眺めておきたい。

二．細川氏支配下の摂津

次に近衛政家が記した『雑事要録』を中心に戦国期の摂津の近衛家領を考察する。『雑事要録』を中心にする理由は、『雑事要録』は『雑々記』などに比べ、記録量が多く、かなりの情報が得られるからである。また『雑々記』は房嗣の料所、近江の信楽郷・越前の宇坂荘が中心となっていて、第1表でもわかるように『雑々記』には摂津の荘園の記載はない。

まず摂津を取り巻く状況、守護の細川政元の動向、近衛家の対応などを眺めておきたい。

細川政元は細川勝元の子で、勝元が応仁の乱の最中、文明五年（一四七三）五月五日に没するとすぐ、管領職を継ぎ、さらに摂津・丹波・讃岐・土佐の守護職も継承した。後、二十八歳の時に起こした明応の政変は、明応二年（一四九三）四月二十二日、河内へ出陣中の將軍足利義材に背いて政元が足利義澄を擁立した事件である。他の管領、斯波氏・畠山氏がそれぞれの家督相続に起因した応仁の乱の中、細川氏だけが安泰であった。それを契機に政元政権は確立する。明応の政変後の事後処理を終えて後、政権の地盤を固め、また守護としての政元の動向を、少し粗いが主なもの『史料綜覧』から拾うと次のとおりである。

明応三年十一月十一日条 摂津守護細川政元、旧に依り、同国多田院に、多田荘七郷の地を寄進す、

明応四年三月十三日条 細川政元、摂津に赴く、尋で、帰京す、

明応四年七月二十三日条 細川政元、摂津・丹波の寺社本所領を収めて、軍資に充つ、是日、幕府をして之を止めしむ、

明応四年七月二十八日条 細川政元、丹波に赴く、
明応四年八月二十六日条 丹波守護細川政元、内藤則繁を守護代と為し、是日、政元、京都に還る、

明応四年十月二十八日条 細川政元、兵庫に到る、
明応四年十一月二十一日条 摂津守護細川政元、摂津より京都に還る、

明応五年閏二月十七日条 摂津守護細川政元、摂津に之く、
明応五年八月二十三日条 細川政元の軍、遊佐弥六左衛門を撃ちて、之を破る、

明応六年八月五日条 丹波守護細川政元、長尾忠三左衛門をして、其所領を安堵せしむ、

明応六年八月十四日条 細川政元、幕府に候す、

明応六年十月二十六日条 細川政元、丹波に赴く、尋で帰京す、

明応六年十二月三十日条 細川政元、多田又三郎をして、其所領を安堵せしむ、

以上、『史料綜覧』から、明応の政変後の摂津守護細川政元の動向を見た。これらの綱文の大半は『後法興院記』『大乘院寺社雑事記』を典拠としている。近衛家も興福寺も摂津に家領や寺領を持っているため、摂津守護政元への関心が高い。ただ明応四年七月二十三日条は『後法興院記』だけでなく、『御湯殿上日記』『実隆公記』『親長卿記』からも引用されている。摂津・丹波に関わる寺社本所領だけに京都の公家にとっては関心が高い。『史料綜覧』の綱文だけでなく、もう少しこの事件の推移を見ておきたい。

事件は明応四年七月十七日に起こった。事が重大なだけに『御湯殿上日記』『後法興院記』『実隆公記』『親長卿記』にも見え、中でも『後法興院記』の記事がもっとも詳しい。

『後法興院記』によれば、夕方、大宮時元が近衛邸を訪れ、白川忠富から内々に聞いたことを伝えた。内容は、西国衆の上洛に備えて摂津・丹波の寺社本所領を細川政元の兵糧料所として知行（寺社本所領の収奪）できるように將軍足利義澄に申し入れたというのである。西国衆上洛の沙汰と

は、前月の二十四日、前將軍足利義材の越中からの呼びかけに呼応し、「西国之面々上洛必定」とあり、その時、公家たち、特に近衛家が義材に内通していると噂された。政家は驚いて否定した。⁸⁾ 忠富は話しを続け、公家たちは急いで参内し、幕府の決定がなされない前に、政元の兵糧料所にならないように、後土御門天皇から仰せ出されるように願い入れようというのである。花山院政長やその他の近臣たちは今夜参内すること、政家も必ず参内するように伝えた。忠富は一条冬良へも政家の参内を伝えるとのことであったので、政家は大宮時元に冬良との同道を伝えに行かせた。参内途中に冬良を伴って参内し、天皇に対面したところ、天皇は明日勅使を立てるとの仰せであった。この日の『御湯殿上日記』『実隆公記』『親長卿記』には、それぞれ「夫かのきにつきて」「勘落」「可没所」などの言葉が使用され、事の重大さと驚きが記されている。

翌日の七月十八日、足利義澄と細川政元の許へ勅使として武家伝奏の勸修寺教秀が立てられた。評定の結果、伊勢貞宗の具申もあり、所領の収奪は延引することとなったが、もし義澄・政元とも承引がなければ、再度使者を立てることであった。実隆は評定の結果が心配で、経緯を記す書状を教秀から受け取っている。⁹⁾ 二十日には忠富が実隆邸を訪れ、摂津・丹波の寺社本所領のことは今日中に天皇より將軍に仰せがあり、明日、政元に伝えられるという。¹⁰⁾ 二十一日には武家伝奏の教秀を通じて勅書が出され、二十三日には「おさえのことにつきて」義澄へ勅筆が親長・教秀・忠富の手で届けられたが、義澄からも政元からもはっきりした返答がなく、忠富からは重ねて申す必要があるとの意見であった。¹¹⁾ 二十五日になっても義澄からの返事は蒙気ということそのままにされ、二十六日に催促が行われた。¹²⁾ 催促した結果、二十七日になって忠富から、やっと義澄が「寺社本所領事」に問答を加え、違乱の煩いはないという返事を得た。政家は日記に「珍重之由」と記した。¹³⁾ 翌日の二十八日、政元は丹波へ下向した。¹⁴⁾

細川政元の政治的動向を一瞥した。禁裏や公家に対して政元は高圧的である。しかし次の細川氏を担う高国になると緩和され、友好的となる。その変化はすでに明応の政変以後、近衛家を訪れる細川氏一族や被官に変化が見られる。『後法興院記』を見ることにしよう。

細川氏一族の者で明応の政変前に近衛家を訪れる初見は細川政誠で、文明十五年（一四八三）正月十六日、年始の挨拶である。この時、政誠は治部少輔、以後、近衛家の花見に参加（^{延徳四年三月五日案}）、明応の政変の少し前に官途は伊豆守となる。続いて近衛家を訪問し和漢会（^{明応二年三月三日案}）に参加、政変後も蹴鞠（^{明応三年七月七日案}）に参加し、文亀三年（一五〇三）正月十日まで毎年のように年末年始の挨拶は欠かしていない。政誠と同時期の細川氏被官では、斎藤元右・四宮長能・鴨井安芸・鴨井三郎右衛門・長塩元親が来訪し、元右・長能は蹴鞠へ参加（^{延徳四年四月二十八日・明応元年正月八日・同日・同十八日・同二年三月七日案}）、鴨井氏はそれぞれ右馬頭の使者として訪れており（^{文明十六年十一月十六日案}）、元親は年始挨拶ぐらいである。それが政変以後、目に見えて細川氏一族及びその被官が近衛家を訪れるようになる。主な訪問記事の最初と最後を挙げ（その間、毎日の来訪ではない）、必要に応じて主な訪問目的を以下にまとめる。なお、人名は記述どおり挙げ、実名が判る範囲で補注を付す。

細川氏一族

明応三年五月二十七日

明応七年三月二十六日・明応八年四月二十日

文亀三年十二月七日・永正二年正月十九日

文亀三年七月二十三日・永正元年十二月二十七日

明応七年六月十八日・永正二年正月二日

永正二年正月二日

細川氏被官人

明応四年八月十日・明応八年十二月十一日

明応三年正月二日・文亀四年正月七日

明応三年八月一日

明応六年十月二十一日・文亀三年正月二日

明応二年九月七日・明応九年四月三日

明応二年九月七日・明応九年四月三日

明応二年四月二十五日・永正二年正月七日

明応三年五月二十三日・明応九年四月三日

細川阿波守 鷲合

細川安房守・父・高国 蹴鞠参加

安房守・父・高国 尚通娘入室来賀

治部少輔 楊弓参加

六郎 楊弓・蹴鞠・短冊礼

九郎 年始挨拶

秋庭備中守

澄元出仕挨拶・半済

鴨井孫次郎 年末始挨拶

玄馬頭元治 近衛家閨所屋の事

香西又六 守護代挨拶・蹴鞠

斎藤々兵衛 蹴鞠

四宮四郎 蹴鞠

長塩又太郎 半済事・挨拶・鞠

薬師寺与一 蹴鞠

さらに近衛家当主が尚通となると、細川高国ほか細川氏一族や被官たちが頻繁に訪れる。近衛家の桜、特に糸桜（枝垂れ桜）は有名である。¹⁸国立歴史民俗博物館甲本や上杉本などの『洛中洛外図屏風』には近衛家の糸桜が描かれている。公家ばかりでなく、將軍や管領も花見を楽しむ¹⁹。もちろん管領は高国である。近衛家では五山の禪僧や連歌師を招いて『毛詩』や『蒙求』などの漢詩漢文や『古今集』や『源氏物語』などの日本古典の講読会・研究会が催された。²⁰細川氏一族や被官たちはこの講読会・研究会にも積極的に参加している。²¹近衛家の文芸サロンである。さらに近衛家で風呂が焚かれると、高国や高国の母が風呂に入りに来る。²²永正八年（二五一一）九月三十日には京兆（細川高国）・典厩（細川尹賢）たちに「風呂アカリニ余勸一献」とあって、京兆母儀や近衛家の女性たちも加わって酒宴を開いている。²³ちょうど高国たちがいったん京都を追われて丹波に逃げ、再興して上洛、敵の細川澄元勢を破った船岡山の合戦より一月ほど後、戦場の垢を落とす風呂であり祝いの宴である。

さて、細川政元の領国、摂津国のうち北摂地域の状況はどのようなものであったろうか。応仁の乱の終結をみる文明九年（一四七七）十一月、北摂地域を本貫とする有力な国人、例えば現在の高槻市には芥川氏、茨木市・吹田市にはそれぞれ茨木氏・吹田氏、摂津市には三宅氏、池田市には池田氏が蟠踞し、彼らはそれぞれに思惑を持って応仁の乱に参戦していた。三宅氏の場合、東軍の細川勝元の守護代、秋庭元明の麾下に属していたが、元明に背き西軍の大内政弘に与した。これにより細川氏の配下から離脱し、荘園侵略を自由に展開することができた。このような行動は他の北摂の国人・土豪にも波及し、彼らにより諸荘園は蚕食され有名無実になり、興福寺領や春日社領もその影響により不知行の地となり、国人たちは荘園領主の支配を否定し、一揆をおこした（『吹田市史』ほか）。

長期にわたる京都出兵のため領国内が不安となった武將たちは帰国を急ぎ、文明九年十一月には応仁の乱は終結を迎えた。細川政元も摂津国内の秩序を維持し、寺社本所領の再興を図るため、文明十四年、摂津に出陣した。このことにより興福寺では注文を遣わしているが、その中に後述するように、近衛家領としても存在する味舌荘・沢良宜荘の上分米一石がそれ

ぞれ含まれており、「応仁大乱以後不知行」であることが記されている。²⁴京都では政元の出陣のとき伝奏からの連絡として、秋葉元重・香川元長の連署奉書で、摂津の寺社本所領を「去渡」ことが伝えられている。政家はそれを書写したのち返却している。²⁵因みに政元の摂津再興の下知はあったものの、当初元長には摂津での思惑があつて元重と意見が一致せず、対立し、延引していたことが『大乘院寺社雑事記』から知ることができる。²⁶

政元の出陣により北摂の国人は制圧され、多くの犠牲をはらった後、再び政元に帰属することとなるが、吹田氏のように本貫地の吹田荘を失った者もいる。『蓮成院記録』によると、延徳二年（一四九〇）十二月、三宅氏一族の三宅五郎左衛門が摂州小郡代になって、政元が再興を行ってからも一部に不安が残っていたため、郡代の指示として春日社へ人夫を課したときの記事であることがわかるが、²⁷三宅氏とて本貫地の島下郡を離れた桜井郷・六車郷・南郷の豊島郡の小郡代であった。このとき郡代は守護代の配下に強く統率されていて、必ずしも自由に活動できる立場になかったとしている（『吹田市史』）。

以上、応仁の乱後の摂津の社会的状況を見た。次ぎに『雑事要録』を中心に戦国期の近衛家に残る摂津の家領の状況を見たい。

三 『雑事要録』に記された近衛家領

『雑事要録』は応仁の乱が終わった翌年、文明十年に筆を起している。それは文明十年分の表紙が「一」となっていることからわかる。家領からの年貢を記入する部分で、家領ごとに収入を記した後、摂津にある家領を最初にして山城・近江・美濃における家領の算用が記されている。摂津の分だけを次ぎにあげる。

沢良宜村^附

四拾石内、廿貫文御料所分、十石宮内卿入道給、相殘給主得分

十二石、

五位庄 卅石、

熊野田村 十八貫余^{錢米}、

天王畑 公事錢一貫三百文、米七石、公事物馬粥米毎月六升ツ、夏三ヶ月麦、

四月廩十二は、五月たけのこ二は、六月ふき十二は、十月クき三百、あらせ十二は、十二月、正月のいわいの物しろよね一斗、すミ二そく、くしかき六れん、正月か、ミ三、

山田村

米卅貳束、錢卅貳貫文

犬同名

米拾七貫文、

片山村

米十束、麦五果、錢五貫文

六瀬庄

米二果、錢拾一貫文、

富松御位田 貳石六斗

半濟分

菅井御位田 五石

半濟分

新免

米七石、麦十六石

小葉院

米八石五斗

(以下、摂津以外のため中略)

仲御牧放出村内御大工給 伍百足請切

但本所内滿寺中也、但別納也

仲御牧放出村内九条 不断光院御寄進分

参貫文

田二町内、田四町分

仲御牧放出村内田満院

合六貫文、

とあつて、現在の尼崎市に含まれる地名については、第1表の注でも触れたように参考に留める。なお以下、家領についての説明は第1表にあげた家領の順序に従うこととする。

放出村

『目録』では「庄務本所進退所々」に属する家領で、前述の橋本義彦氏が『国史大辞典』近衛家領条で分類した⑤にあたる(以下、○の番号は橋本氏の分類番号)。戦国期の放出村は前述のように湯川「近衛家領摂津国放出村について」(『戦国期公家社会と荘園経済』前掲)で紹介したところである。庄務権は近衛家にあつて、文明十三年から永正二年まで年貢は米と錢貨で納入されている。そこでは主に錢貨の収納状況と納入された米について、沽却している実態を詳述した。また、当荘は熊岡四郎衛門・西面三郎が近衛家へ任料を払い、代官となっている代官請所の荘園であつた。現在、大阪市鶴見区に放出東、城東区に放出西の地名が残っている。

仲牧

『目録』では「庄務本所進退所々」に属し、橋本氏の分類は⑤。京極殿、すなわち藤原師実の所領であつた。前述の算用で「仲御牧放出村」を紹介したが、この仲牧は、放出村に見た仲御牧とは異なり、高槻市唐崎付近にあつたと推定する。『雑事要録』には文明十六年分に「十石」とあるだけで、前後の年は家領名の記載だけで年貢の納入はない。ただ『後法興院記』明応元年(一四九二)十二月三日条に春日社師中東時就が近衛家を訪れ、政家に対面したときの記事がある。それによれば仲牧にある辛崎は近衛家が春日社へ寄進し、正真院大膳亮経頼が奉行を勤めていたのであるが、文明十七年(一四八五)に売り払ったことである。買主は入江与三左衛門であるが、坂口秀泰が奉行のときに摂津住人奥田なるものが買っていたということであつた。この事を本所として下知をしてないのであれば、訴訟は棄破し御師職は改補して、経頼の祖父家久に仰せつけられている。しかしながら今、経頼が沽却したことは本所の下知でないならば。先例に任せて棄破し、時就を新たに補任してほしいということであつた。政家は承知したのである。十二月五日に時就は辛崎村の奉行ということ^②で補任料を政家へ支払っている。

五位荘

『目録』では「庄務本所進退所々」に属し、⑤に分類される藤原師実の所領であつた。五位荘の名は高槻市の番田井路に架かる橋に「五位ノ庄橋」「ごいのしよはし」として名が残っている。この付近が戦国期の近衛家領、五位荘があつた場所である。井路とは水田の不要な水を排出するための水路のことで、江戸期の承応二年(一六五三)に現在の番田を含む旧大塚村から柱本を経て淀川へ向けて開削された水路である。五位ノ庄橋は芥川の下を潜って水路が通る伏せ越しの下流に架かる橋で、周辺は高槻市芝生及び唐崎の地である。

五位荘は前述の算用に記載があることを紹介した。年貢納入の記事は文明十三年にあるが、その前に『後法興院記』文明十二年七月二十七日条を見ておきたい。そこでは「摂州住人西面三郎」なる者が上洛し、放出村と五位荘の代官を希望している。現在も五位ノ庄橋から三キロ程南に西面の



高槻市芝生・唐崎北に架かる五位ノ庄橋

地名が残る。西面三郎はこの辺りを本貫地とする在地の国人土豪であろう。西面三郎が近衛家を訪れた翌年、文明十三年の十月二十三日と同年十二月十四日にそれぞれ二百疋・三百疋が納入されている。さらにその年の「五位庄」条には年貢納入記事の他に「改代官、香西惣右衛門也、任料二百疋□□」の記事もある。続いて『雑事要録』の「御礼物事」の十月二十五日の記事に「五位庄代官任料二百疋」がある。「御礼物事」とは他の年では「自処々之礼物」などの項目でも挙がっている、近衛家が他所から受けた金銭や品物が記されている項目である。文明十三年になって代官が西面三郎から香西惣右衛門に改代された理由は不明である。香西惣右衛門は名字から推定して、細川氏被官で摂津守護代も務める香西元長の一族ではなかろうか。ここにも近衛家と細川氏一族とのつながりを見ることが出来る。ただ西面三郎はこの後の十二月二十八日近衛家へ一荷一種を贈っている記事があることも付記しておきたい。

大原庄

『目録』には高陽院、藤原泰子の所領であり、①に分類される荘園であ

る。高陽院は藤原忠実の娘で鳥羽上皇の皇后である。

高槻には古代島上郡の大原駅があったが、現在大原の地名は残っていない。『実隆公記』文亀二年九月二日条に「摂津国原庄（或号大原庄、備明）」の文言があり、原の地名は高槻市街から北方、摂津峠を超えた盆地に現存する。なお、「陽明」は近衛家のことである。現在、庄域と考えられる場所に八阪神社があり、境内に春日神社が合祀されているので、かつて春日神社がこの付近にあったことがわかる。また『雑事要録』文亀三年・同四年分の大原庄条に「神峯山」が近衛家へ炭一荷を収めている。高槻市原には神峯山寺があり、『大阪府の地名』（平凡社）ではこの地を近衛家領に比定している。

大原庄からの年貢は文明十一年から永正二年まで見られ、その内容を文明十一年分に見る。

『雑事要録』文明十一年

大原庄

九月廿四日

花藏院ヨリ松茸籠二各五十本、焼米昏袋二進之、是毎年之事也云々、不断光院へ五本御時衆中へ十本、焼米スコシ長

泰許へ五本分給之、前々如此云々、国ヨリ長泰私へ松茸以籠、米紙袋遣之云々、

十二月十七日

御炭一荷到来、

同 廿三日

御炭一荷到来、五本之扇五本、先日ハ炭進上之方ト今日進上之方ト両方へ遣之、

同十二年三月九日

五百疋沙汰之、使粮物二十疋、長泰分一、百疋国

へ遣、帶三すち、□□ひの具十荷□タム也、彼是一貫六十一云々、以上□物二貫二百六十一也、

記入内容は年によって若干の相違があるが、他の年もほぼこのような内容である。「御時衆」は不断光院の御時衆である。文明十五年から「御霊殿御知行」と記されている。御霊殿は近衛家で未婚の女性が世襲する名で、仏事に携わっていた。この年から納入される年貢銭の二割が長泰の「徳分」（得分）となつて得ることになる。長泰は近衛家の家僕であつて、大原庄の給主であつた。長泰が給主としての得分は明応五年（一四九六）

十一月二十四日以来、年貢銭の五割に上がる。本来「此得分五分之一」なるところ「佗事申聞、美乃知行無為之間、半分給之」となったのである。つまり長泰は美濃にある近衛家領の給主でもあったが、そこからの収入がなく窮状を訴えた「佗事」のため、近衛家として長泰の得分を増額したのである。

ところで、大原莊の冒頭に『実隆公記』を引用したが、その中に「芥川」が代官であることも見た。芥川氏は島上郡芥川の地を本貫とする在地の国人士豪で鎌倉時代にその名を見ることができ、戦国期には細川氏の被官であった。大原莊の代官であった初見は、『後法興院記』長享二年（二四八八）十一月十二日条に、「原殿代官芥河、禅閣御訪百正進上」とある。原殿は大原莊のことで、禅閣は政家の父房嗣のこと。房嗣はこの年の十月十九日に薨じており、香典百正を近衛家へ贈った記事である。少なくとも芥川氏は長享二年から文龜三年までの十五年間、大原莊の代官であった。この後、芥川氏は没落し、能勢氏が芥川の新城を築くこととなる。

沢良宜村

『目録』では「庄務本所進退所々」に属し、⑤に分類される。現在地は茨木市南西部、近畿自動車道を挟んで、東に沢良宜東・沢良宜浜、西に沢良宜西の地名が現存する。

沢良宜村からの年貢納入は文明十一年から見え、千疋収められている。算用にあるような米の納入は尚通の代になってからで、それもわずか二石九斗二升（大永三年）、二石四斗五升五合（大永四年）しかなく、御料所分も「廿貫文」は収められたことはない。最も多く納入された年は文明十八年の十四貫文である。また、沢良宜村は文明十三年から房嗣の料所と記されるようになる。

文明十一年の沢良宜村の割注には「地下代官三宅出羽守（給主広橋藤堂豊後守、上分百疋也）」とある。代官は三宅出羽守で、給主は「広橋藤堂豊後」であったことがわかる。三宅出羽守もやはり在地の国人士豪で、細川氏の被官であるが実名はわからない。

なお給主の「広橋藤堂豊後」とあるのは、武家伝奏で、近衛家の家礼も勤める広橋家の家僕の藤堂家である。官途名豊後守を名乗る人物は、四

位・五位の叙爵名簿である『歴名土代』には景元と景安の二人の名を見ることができ、景元が正五位下に叙せられた文明二年六月十九日の尻付に「藤堂豊後守景富男」とあり、景安が従五位下に叙爵されたのは文明十年六月十二日のことで、その尻付の「藤堂右京亮景勝朝臣二男」とある。景富か景勝のいずれかであろう。さらに沢良宜村には上分、すなわち年貢の他に寺社へ上納する分二〇〇疋がある。

水尾村

『目録』には次の熊野田とともに掲載はないが、水尾の地名は現在沢良宜村の北に接する地名である。このことから考えて水尾村は元は沢良宜村に含まれていたのが分離したのではなからうか。

水尾村について、『雑事要録』では文明十一年から文龜四年（永正元年）まで見る事ができ、尚通が記した『大永三年記雑々』に年貢の納入があ



茨木市水尾、水尾公園

る。『雑事要録』文明十一年分の年貢の納入状況は次のとおりである。

『雑事要録』文明十一年

水尾餅事

十月一日 四十八枚

十一月二日 四十八枚、四郎私へ十枚、

十二月三日 四十八枚、

同 廿八日 鏡以下餅色々被沙汰、

コモチ井 千枚也、

鏡五マイ、コモチ井千マイ、

御菌固鏡 三マイ、七、めこ、

こ鏡 卅五枚、

用脚百疋被沙汰歟、

とあって、十月一日から年末にかけて餅と用脚が納入されている。他の年も大体このような年貢納入状況である。その内、近衛家の家僕を勤める錦小路親康と慶順が主として餅を給分として与えられている。彼ら二人は給主であろう。

文明十六年（一四八四）五月十七日には、細川九郎（政元）が水尾代官のことで、政家の許へ使者を送っているが、詳細は不明である。その後延徳四年（明応元年 一四九二）二月二十八日になって代官の三宅五郎右衛門が死んだため息子の新三郎が任料一〇〇疋で代官を継いでいる。かつて政元が水尾村の代官のことで使者を送ったのは、三宅五郎右衛門を水尾村の代官とするよう依頼したのであろうか。明応七年九月七日になって、新三郎は殺害されたため、三宅五郎左衛門が任料二〇〇疋で代官を継ぐ。五郎左衛門は後述の新免村の代官にもなる人物である。五郎左衛門は前述したように細川氏被官の三宅氏一族であることは明白である。

熊丸名

熊丸名は『目録』には見えない。『雑事要録』文明十年に「水尾熊丸御はつをにて、沙汰^{云々}」とあるから水尾村の枝郷かもしれない。年貢は文明十年から明応九年まで銭納が見られる。文明十一年には「代官野田藤右衛門請切千疋、根本千五百疋」とある。最も多く納入された年は文明十九

年・長享二年・明応三年・同六年・同七年・同八年・同九年の六百疋である。代官の野田氏についての詳細はわからない。

山田村・片山村

『目録』には見えない家領である。いずれも現在も吹田市にある地名であるが、山田村は文明十三年十二月二十九日に三〇〇疋納入されているだけで、他の年には納入はない。三〇〇疋のうち半分の一五〇疋は実治に遣わされている。実治は河鱈実治のことで近衛家の家僕であった。実治は給主であろう。

小薬院

片山村については文明十年の算用の記載だけで、年貢の納入はない。

『目録』には見えない。現在、地名は見あたらないが、『吹田市史』第四巻史料編Ⅰ掲載の一二四「沙弥某讓状」・一二七「大法師賢実讓状」・一二八「星王丸寄進状」に小薬院の名が見える。いずれも「垂氷御牧」にあった地名で、少なくとも戦国期までは残っていた地名であろう。なお『吹田市史』によると原史料には「垂氷御牧」とある。

『後法興院記』長享元年（一四八七）八月二十三日条に「補任小薬院代官職」という記事があるが、誰が代官に補任されたか不明である。『雑事要録』明応六年（一四九七）三月十六日条に香西元長が請切三〇〇疋で代官に補任されている。したがって明応六年から同九年までは毎年年貢銭の納入があるが、九年には二二〇〇疋で元長へ沽却している。

垂海

垂水牧のこと。『雑事要録』では年貢が納入されている文明十三年（一四八二）から永正二年（一五〇五）まで、家領名は「垂海」とある。代官の名は見えないが、毎年決まって五月三日に「根昌蒲^{（音）}」と公事銭七〇疋が収められている。端午の節句用であろう。

新免村

『目録』には見えない。豊中市本町周辺に比定される地である。年貢は『雑事要録』では文明十五年から文亀四年（永正元年 一五〇四）まで、見ることができる。尚通が記した『大永三年雑々』『大永四年雑々』は二年分を記しているが、そこに新免村が見える。政家の代に比べ公事物の納

入はなく、金貨だけで、大幅に減少している。

政家の父房嗣の料所で、代官は文明十七年に任料五〇正で清孫右衛門が補任されている。名字から考えると幕府奉行人の清氏一族の者であろうか。長享二年（一四八八）、房嗣は前述の小薬院とともに美濃大井郷（岐阜県大垣市カ）を料所とすることになったため、新免村は近衛家の管理となった。³⁸しかし翌年の長享三年からは「大將料所」となっている。大將は左近衛大將の尚通のことである。

明応五年（一四九六）二月十二日、清孫右衛門は代官を代替された。任料一〇〇正を納めているが、人名の記載がない。³⁹また翌年の八月には、代官を改易している。ここにも名前の記載がない。しかし、明応八年に「代官三宅五郎衛門」とだけ記載されているため、清氏が代替され、翌年改易された後の明応八年には「代官三宅五郎衛門」の名が見える。明応六年以後、三宅五郎衛門が新免村代官を勤めたと考えて間違いあるまい。ところで明応七年に水尾村代官は三宅五郎左衛門が補任されていることは前述した。新免村代官「三宅五郎衛門」には「左」の字がないが、水尾村代官と同一人物であろうか。

熊野田村

文明十年の算用に記載があるだけで、年貢の納入は見られない。

天王畑

『目録』には見えない。大阪府豊能郡能勢町にあった近衛家領で、文明十三年に能勢五郎左衛門が任料一〇〇正を納め補任されている。給主は前述の山田村と同じ河鰭実治で、年貢金の半分が得分となっている。

文明十九年（長享元年 一四八七）、近衛家領の天王畑は殿下渡領と混在していたことから、九条政忠は近衛家が混乱していると誤って苦情を伝えてきた。⁴⁰殿下渡領とは、氏長者が執り行う行事の費用を負担する所領で、氏長者が交替するとき新任者へ引き継がれる。この年は二月九日に鷹司政平から九条政忠に交替していた。政忠からの申し出で政家は不審に思っている。六月六日になって、九条家の誤りが判明したのであった。内容は石井雅楽助（親治）は九条家の家僕でありながら、摂津守護代の寄子として守護代の下知に従って、天王畑を混乱したのであった。政家は地下か

らの注進で知ったため、政忠へ苦言を申し出たが承引されなかったため、政家としては「有縁」をもって守護代へ伝えたところ解決した事件であった。

最後に大番について触れる。

大番米

見出しの「大番米」は地名ではなく、『雑事要録』文明十五年から「大番米処々」という項目を設け、大番領からの収入、番頭への下行が記されているため、便宜上は「大番米」を見出しに使用した。撰関家の大番については、「大番領」「大番役」「大番舎人」という大番に付随する言葉が種々あることから、今まで大番領や大番役、さらに大番舎人等、制度としてあったことからその位置づけや実態について論じられてきた。⁴¹その中で清水三男氏は『雑事要録』に言及するものの、近江国の説明が中心である。⁴²

以下『雑事要録』撰津国の「大番米処々」の概略を述べる。『雑事要録』の文明十年は、政家が記述を始めた年であることは前述した。その年、大番米のことについても「撰津国大番米事」の見出しで、永享時分（一四二九～四〇）以来の経緯が記されている。それは請切の契約者による多寡や請切の契約を行ったが、履行しないため算用どおり実行されないことがあった。そのため「番頭給分事ハ枅々相尋名々実名番頭実名可注置者也」と自戒している。政家が引き継いだとき番頭は八名であったのが、文明十三年には十一月十二日・十三日と一人ずつ「新補」して十人となっている。⁴³文明十四年九月四日には番頭久頭が出納の子為音に殺害される事件が起こっている。久頭の父久具が政家に訴えたので、政家は奉行の松田豊前守に尋ねたところ、「孫子」の罪は「父祖」が関知するところでないが、父祖が同意しているのであれば同罪であるとの解答があったので、政家は久頭の父へ伝えた。どのようにしてでも訴えてほしいとのことであったが、後の顛末は記されていない。

このような事件を経て『雑事要録』文明十五年から「大番米処々」への記述が始まる。内容は次のようである。

『雑事要録』文明十五年

福井 三貫文、三十疋不足、味舌 五貫六百文、垂水 二石一代二貫文不足、
部符 五百五十文、矢田分 五貫五百文、南郷 一貫文、出立分自上
候、

以上十七貫六百五十文上使路銭下行、

攝州
大番頭処々 宛行番頭、

去月 廿六日下向、 此内二十疋路銭二引之、

廿一日 九貫此内三十疋路銭云々、六百文余、

廿三日 三貫三百文、

十二月 十四日 番頭方御訪下行、出納貳百疋、新番頭七十疋、

其外百五十疋宛以上十三貫二百文、

十二月廿七日番頭
九人各廿疋宛下行 廿二日 貳貫六百五十文、

以上十五貫三百五十文、此外度□□□

このような内容の記事が明応九年まで記されている。大番米が課せられていた地は福井(茨木市)・味舌(別所)・部符(摂津市)・垂水・南郷(吹田市)・矢田(不明)で、右に示す文明十五年分にはこほり・穂積(豊中市)の記入がない。その二箇所からは納入がなかったためであろうか。いま右の地名から納入された分は、「以上十七貫六百五十文」とあつて計算してみると合致する。しかしその後、「以上十三貫二百文」「以上十五貫三百五十文」については、上がっている数字を用いて計算し直したが、合致しない。どのような計算をしたのか不明である。

前引の『豊中市史』の記事、摂関家の使用人であつた大番舎人の職務は、護衛・雑役であり、役務の報酬として年貢などが免除されるようになっていたのであつたが、戦国期には「番頭の手によって、番米が収められ」ることに変化し、それも右に見るようにほとんど銭納となつている。さらに護衛については、清水三男氏が指摘しているように近衛家の場合は、信楽荘の荘民が兵士として上洛し、近衛家の護衛を行うようになり、番頭は専ら政家の拝賀時の雑役に就くことが目立つようになるのである。

最後に『雑事要録』文明十六年「自処々礼物」の、
文明十六年十月二十六日条に、

南郷番米代官生嶋楠一・肴一種年貢四百、
疋二請

同十月二十七日条に、

穂積番米代官小倉五郎左衛門任料三十疋、百疋二請、
次いで、『雑事要録』文明十七年十二月二十日条に、

七貫文、矢田分三宅五郎左衛門此内忠安上路銭三百文、夫貫二百五十文以
上六百五十文引之、殘六貫三百五十文、

とあることに注目しておきたい。

大番米の地にも代官が補任され、代官請所となつていた場所も出ていることを紹介しておく。また水尾村の代官三宅五郎左衛門の名が見える。ここでも代官であつたか不明である。ただ忠安が上洛するについて、差配していることがわかる。

四. むすびにかえて

―『近衛家所領目録』から『雑事要録』へ―

大阪府下の摂津にあつた近衛家領は、『目録』(『近衛家所領目録』)が作成された時代から戦国期にはどのように変化するかを見てきた。橋本義彦氏が『目録』記載の家領を『国史大辞典』近衛家領条で分類したのを再度活用してその変化を見ると、次の第2表のように変化していることがわかる。

第2表を作成した結果、思い出されるのは『吹田市史』第一卷第六章第三節「興福寺の直務化」にある次の文章である。

支配復活を目論む両社寺は、直属の寺僧・神主を給主に任命して、その荘務を請負わせる体勢を取った。(略)給主は知行主としてその荘園の支配をまかされていた。給主はおそらく南都にすることが多かったと思われるが、代官を派遣して自らの責任において在地の荘官以下を管轄して荘園支配を請負い、得分は収取の余剰分より得ていたものと考えられる。したがって、この給主請負制を設置することにより荘園領主の寺社側は在地に新たな自らの支配関係をもち込み、荘務の回復をはかったのである。

ここでは興福寺・春日社の体制を述べているが、文中「両社寺」を近衛家、「直属の寺僧・神主」を家僕に置き換えれば、そのまま近衛家の支配

第2表 「目録」から『雑事要録』への家領の変化

	家領名	家領の性格	代官有無	家僕へ得分	備 考
目録にあり	放出村	⑤ → ⑤	○		御霊殿料所 房嗣料所
	仲牧	⑤ → ③			
	五位荘	⑤ → ⑤	○		
	大原荘	① → ⑥	○	○	
	沢良宜村	⑤ → ⑥	○	○	
目録になし	水尾村	⑥	○	○	房嗣から尚通料所
	熊丸名村	⑤	○		
	山田村院	⑤		○	
	小葉院	⑤	○		
	垂海	⑤			
	新免村	⑤	○		
	天王畑	⑥	○	○	

⑤・⑥の区別は代官が存在しても、得分を給付される家僕が見えない場合、もしくは得分を給付される家僕だけの場合で、代官の存在があつて、年貢収入の一部が家僕に給付があるものは⑥とした。

参考 橋本義彦氏の『国史大辞典』近衛家領条での分類

- ①私的な別相伝地
- ②本所として一定の得分を収取する所領
- ③進止権を保留して有縁の寺社に寄進した所領
- ④基本的な年貢収取権を寺社に寄進した所領
- ⑤本所として荘務を進退する所領
- ⑥在地領主を請所として一定の得分権を持つ所領

注

ざるを得なかったのは、やはり天王畑の石井親治の例で見たように、九条家と守護代の寄子という二君に仕えることがあつても、一方にとって敵対した関係にない限り許されたのである。

- (1) 平成20年1月～2月、東京国立博物館で陽明文庫創立七〇周年記念特別展が催された。その図録『宮廷のみやび 近衛家一〇〇〇年の名宝』所収の名和修氏「陽明文庫の沿革」ほか参照。
- (2) 陽明文庫には『雑々記』は九冊、『雑事要録』は二三冊、『大永三年記雑々』『大永四年記雑々』の二冊が残されている。詳細については湯川敏治『戦国期公家社会と荘園経済』続群書類従完成会 平成17年 所収の「近衛家の家産経済の記録―『雑事要録』・『雑々記』について―」を参照されたい。ほかに同書には『雑々記』『雑事要録』を史料とした「近衛家領越前国宇坂庄について」「近衛家領撰津国放出村について―戦国期を中心に―」を所収。
- (3) 中村直勝氏『荘園の研究』昭和14年 星野書店(後『中村直勝著作集』第4巻所収)。
- (4) 永原慶二氏『日本封建制成立過程の研究』昭和36年 岩波書店 第I部第二「公家領荘園における領主権の構造」。
- 一 鷹司院子・太閤(兼経)・龍前に譲られた家領 十四所
- 二 荘務無本所進退所々 五十一所
- 三 寄進神社仏事所々 七所
- 四 年貢寄神社仏事所々 四所
- 五 荘務本所進退所々 六十所
- 六 請所 二十所
- 七 大番国々 三所
- 八 散所 五所
- 九 主殿 一
- (5) 橋本義彦氏執筆。この分類は後述の『大阪府史』『池田市史』でも踏襲されている。
- (6) 古野貢氏「解題」『春日大社南郷目代 今西家文書(本文編)』豊中市教育委員会 平成16年。
- (7) 鶴崎裕雄「大阪の河川と海港の文化と文学(稿)―地域学・地域文学論資料収集の一作業―」関西大学『なにわ・大阪文化遺産学研究センター』二〇〇六『平

成19年3月、同「地域と旅の説話―摂津国神崎川の場合―」『説話論集第十七集 説話と旅』清文堂 平成20年。

- (8) 『後法興院記』明応四年六月二十四日条。
- (9) 『後法興院記』『親長卿記』『実隆公記』明応四年七月十八日条。
- (10) 『実隆公記』『親長卿記』明応四年七月二十日条。
- (11) 『御湯殿上日記』『親長卿記』明応四年七月二十三日条。
- (12) 『御湯殿上日記』『親長卿記』明応四年七月二十五日条。
- (13) 『御湯殿上日記』明応四年七月二十六日条。
- (14) 『後法興院記』『御湯殿上日記』『実隆公記』明応四年七月二十七日条。
- (15) 『実隆公記』明応四年七月二十八日条。
- (16) 政誠の息子であろう。明応二年二月一日に近衛家を訪れた時は弥五郎、文亀三年七月二十三日の訪問のときは治部少輔、次ぎに訪れた永正元年十二月二十七日では伊豆守の官途名を持っている。
- (17) 明応四年三月一日以降、備前守の官途名で記述され、明応九年三月一日には息子を連れ訪れている。その後、父子での訪問はしばしばあり、文亀三年十二月七日には息子が元服した挨拶の訪問もある。
- (18) 鶴崎裕雄「近衛殿の糸桜―洛中洛外図屏風に読む公家社会の位置―」『文学』岩波書店 昭和59年3月（後に『戦国期公家社会の諸様相』和泉書院 平成4年に再収）。
- (19) 『後法成寺関白記』永正八年三月八日条ほか。
- (20) 鶴崎裕雄「中世後期、古典研究の側面―近衛尚通の場合―」帝塚山学院短期大学研究年報31（昭和58年12月、後に『戦国期公家社会の諸様相』前掲に再収）
- (21) 『後法成寺関白記』永正十七年八月十二日条ほか。
- (22) 鶴崎裕雄「風呂と寄合の文化―公家日記を中心として―」『藝能史研究』84 昭和59年1月（後に『戦国期公家社会の諸様相』前掲に再収）湯川敏治「公家女性性の生活―近衛尚通の正妻、維子の場合―」『ヒストリア』一三九 平成5年6月（『戦国期公家社会と荘園経済』続群書類完成会 平成17年に再収）。
- (23) 『後法成寺関白記』永正八年九月三十日条。
- (24) 『大乗院寺社雑事記』文明十四年四月七日条。
- (25) 『後法興院記』文明十四年四月九日条。
- (26) 『大乗院寺社雑事記』文明十四年閏七月十二日条。
- (27) 『多聞院日記』五 所載「蓮成院記録」延徳二年十二月条。
- (28) 『雑事要録』明応元年十二月五日「自処々礼物」条。
- (29) 『高槻市史』第二卷 本編Ⅱ 高槻市 昭和59年。
- (30) 『雑事要録』文明十三年十二月二十八日、「御礼物事」条。

(31) 当時、美濃国には手向郷・岩村郷（岐阜県恵那市）、大井郷（大垣市カ）、太田郷（美濃太田市）、生津郷（瑞穂市）、苗木郷（中津川市）の近衛家領があったが、明応五年にはそれらの家領からの収入は記されていない。また岩村郷に至っては年貢収入の上分千疋が、三福寺へ寄進する約束になっていた。三福寺は近衛家が信仰する日蓮宗の寺院である。

(32) 進藤長泰の収入については、湯川敏治「公家日記にみる家政職員の実態」『ヒストリア』一二〇 昭和63年9月（『戦国期公家社会と荘園経済』前掲に再収）参照。

(33) 鶴崎裕雄「戦国初期の摂津国人層の動向―芥川城主能勢氏とその文芸、特に連歌を中心として―」『史泉』43 関西大学史学会 昭和46年9月（後に鶴崎裕雄『戦国の権力と寄合の文芸』和泉書院 昭和63年に再収）

(34) 『大永三年雑々』『大永四年雑々』摂州沢良宜村条。

(35) 『雑事要録』文明十八年十二月二十四日、沢良宜村条。

(36) 『後法興院記』文明十六年五月十七日条。

(37) 『雑事要録』延徳四年（明応元年）二月二十八日、水尾村条。

(38) 『雑事要録』長享二年、新免村条。

(39) 『雑事要録』明応五年二月十二日、新免村条。

(40) 『後法興院記』文明十九年四月二日条。

(41) 牧健二氏「摂関家大番役及び大番領の研究」『史林』17・3・4 昭和7年7月・10月、「摂関家の大番領土と和泉国大鳥庄」『歴史と地理』30・1・2・3 昭和7年7月・8月・9月、小島鉦作氏「摂関家大番領としての摂津国猪名庄」『歴史と地理』60・4 昭和7年、清水三男氏「摂関家近江国大番領の一史料」『歴史と地理』34・2 昭和9年8月（後「清水三男著作集 第二卷 中世の村落」『摂関家大番保』改題所収 校倉書房 一九七四年）、渡辺澄夫氏『増訂 畿内庄園の基礎構造 下』（吉川弘文館 昭和45年）。

(42) 清水三男氏「摂関家近江国大番領の一史料」(前掲)。

(43) 『後法興院記』文明十一年八月二十四日条。

(44) 『後法興院記』文明十三年十一月二十二日・同二十三日条。

(45) 清水三男氏「摂関家大番保」(前掲)。

(46) 例えば『後法興院記』文正元年八月十八日条。

(47) 例えば『後法興院記』文明十二年三月二十六日条では、県召除目で政家は「奏関白慶」をするが、このとき番頭四人は松明を取っている。